

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



簸ノ川分教会

大正12年10月25日 設立
昭和45年3月8日 移転鎮座祭
昭和45年3月9日 移転奉告祭

教祖百四十年祭 笠岡大教会活動方針

つながろう、おやさまのお心に。
つなげよう、信仰の喜びを。

活動
目標

ひながたを学び、そのお心を実践しよう。



立教187年
11月号

秋季大祭講話

陽気ぐらしに向かつて

喜び感謝を声に出そう

大教会長様

立教187年大教会秋季大祭は10月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よぶばく・信者ら多数の参拝のもと執り行われた。

大教会長様は、親神様が、この教えを啓かれたのも、ふしを通して成人を促されるのも、子供可愛い一条の親心に他ならないと述べられ、その親心にお応えする年祭活動の歩み方として、年祭活動後半に打ち出された実践項目について、一步踏み込んだ思いを披瀝して、陽気ぐらしへの道標とされた。講話内容は次の通り。

ただ今は、笠岡大教会の立教187年秋の大祭を、皆さんと共に陽気に勇んで勤められました。今日この日を迎え、おつとめを勤められたことを、この場にいる皆さんといない方も含めて、笠岡に繋がる皆さん方にあらためて御礼

申します。誠にありがとうございます。皆さん方におかれましては、日々は陽気ぐらしに向かつてのたすけ一条の御用のうえに、また教祖140年祭に向かう年祭活動のうえに、それぞれお励みくださいまして、誠に苦勞さまです。本日は、秋の大祭を勤めるにあたり、思うところを話しますので、お付き合いのほどよろしく願います。

(拍手)

本日は、大卒4つのことに関して話します。1つ目、「大祭・秋の大祭を勤める意義・意味合い」について。2つ目、年祭活動期間に私自身の通り方として、「起こってくる物事をどのように捉え、どのように通るか」について、私がしていること。3つ目、年祭活動期間、通るなかで起こってきた出来事について。4つ目、年祭活動後半の動きとして、大教会から打ち出した実践項目、「毎日、喜び感謝を声に出そう」について話して締めくくります。

▼秋季大祭の意義

ある若い方が願書に署名捺印を欲しいと大教会にこられ、子供の話になりました。初めての子が9月に生まれ、子供って本当に可愛いですよねと仰つ

た。それを聞いて私は、いや、本当にそうですよねと全力で同意しました。私にも3歳3ヶ月になる長男と8か月になる長女、2人の子供がいます。この子供たちが本当に可愛くてしようがありません。子供というのはそもそも可愛いものだと思いますが、私は、子供が生まれ親になって「我が子」を見たときに、「我が子」というものはこんなにもかわいいものかと、それまで想像できていなかった、想像以上の、何とも言えない可愛さを、親になって初めて味わいました。長男が生まれて3年3ヶ月経ちますが、それは今も変わってなく、本当に毎日もう可愛くてしょうがない、そんな思いでいっぱい

です。お道の教えでは、我々人間と神様・親神様の関係は親と子の関係だと教えられます。おさしづに、人間幾何名の子でも可愛い。神も同じ事。

(明治22・10・21)

とあります。

親神様が私たち人間を見つめる視線は、私が「我が子」を思うのと同じように、可愛くてしょうがない、もう何でもしてやりたい、そんな思いに違いないと、私は思います。

子供が可愛くてしようがない親神様が、今から187年前、天保9年10月26日に、教祖を月日のやしろとお定めになり、その身の内に入り込まれて、世界一れつをたすけるために始められたのが、このお道の教えです。

この立教の元一日を祈念して、秋の大祭が勤められます。秋の大祭を勤めるに当たっては、この立教の元一日に込められたをやる思い、子供が可愛くてしょうがない、だから世界一れつをたすけて陽気ぐらしをさせたい、この思いに立ち返る、その機会にしたいと思います。

それぞれご自身の日常生活を振り返って、このをやる思いに果たして近づくことができているかどうかを、思案いただきたい。

▼年祭活動期間の通り方

私自身が、果たしてその思いに近づいているのかどうか、それを振り返る意味合いで、この年祭活動期間、私ができるように物事を受け止めようと心に決めて通っているかを話します。

それは、「ないことに囚われるのではなく、あることに意識を向け、そのなかから喜び感謝を見つけて通る」。



「ランドルト環」の図を示し、人間の「意識」の習性について話される大教会長様

どういふことを説明するのに、これ(左写真)をご覧ください。「ランドルト環」といふ記号ですが、これを見たときに、どこに目が向くでしょうか。輪の線の上でしょうか。輪が欠けている辺でしょうか。おそらく多くの方は、輪が欠けている部分に目が向く・意識が向くのではないのかと思います。どうやら我々人間には欠けているところ・足りないところに意識が向く・目が向く、そういった習性があるようです。これが、ものではなくて、ひとを見たときに適用されるといふなるか。——本当はいいところがいっぱいあるはずの人でも、欠点・足りないところが

なくなってしまうと、そこを不足に思ってしまったたり、また、自分自身を見つめたときに、ほとんどは長所・良いところもいっぱいあるけれども、できないこと・足りないところ・欠点が気になっ

てしまい、落ち込んでしまったり、そんなことがないでしょうか。そうではなくて、そういった習性があることを踏まえたうえで、意識を「ないところ」ではなく「あるところ」に向ける。

「ないことに囚われるのではなく、あることに意識を向け、そのなかから喜び感謝を見つけて通る」——その「喜び感謝を見つけて通る」ためのヒントは、教祖のひながたにあると思います。起こってきた出来事に対して、教祖ならどうされるのか、教祖なら何と仰るのかを思索したい。

『論達第四号』には、教祖のお言葉が3つ出てきますが、その中の1つ「水を飲めば水の味がする」といふお言葉は、「親神様が結構にお与え下されてある」と続きます。

親神様は、陽気ぐらしに向かつて心の成人を進めるために、今の自分に1番良いものを、1番良いひとを、1番

良い環境を既に与えられていると思えます。

その思索を進めていくときに忘れてならないのは、どんなことが起きても、そこには、「子供が可愛くてしょうがない、たすけたい、陽気ぐらしをさせたい、心を成人させたい」というをやの思いが必ずあるということ、それを忘れずにいたい。

▼年祭活動期間に見せられるふい

さて、実際にそのように思い心に決めてこの年祭活動期間を通るなかで、素直に「ありがたいな・うれしいな」と思えることもあれば、なかなかそうは思えず、どうしても「辛いな・しんどいな」と思ってしまうようなことも起こってきます。

実際に私自身に見せられた出来事ですが、今年の5月1日、夕づとめのときに、突然、歌声が出なくなりました。

このように自分の体に起こってきたときに、私がどうしたか。——身上として見せられているこのことにも神様の親心は必ずあると。そして、神様からのメッセージ、お知らせを身上という形で見せられていると。それを喜ぶ、感謝する。まず、朝夕のおつとめの際

に「お知らせいただきありがとうございます。——そう思つて通りました。」

そうして通るなかで、ある日、妻から「会長さん、今、こうして喉に身上を見せられて、どんな思索をされましたか、どんな心定めをされましたか」と聞かれ、「思索できていなかった、心定めてきていなかった」ことに気づきました。

おふでさきに、

このよふにやまいとゆうてないほどに
みのうちさへりみなしやんせよ 二 23
めへくのみのうちよりもしやんして
心さだめて神にもたれよ 四 43
とあります。

毎朝、読んでいるおふでさきにこれほど明確に示されているにもかかわらず、私はそれができていなかったと気づきました。

言うなれば、神様からのお知らせ、メッセージ、それを仮にお手紙だとしましょう。お手紙を頂いて、頂いたお手紙を「あー、ありがとうございます」と感謝して、お礼申し上げて、実は封を切つて中身を読んでいなかったということでした。

いう身上を通して、神様はどんなこと
をお知らせくださっているのかという
理の思案をせねばならない、私なりに
思案しました。

そうして思案するなかで気づいたこ
とがありました。それは、朝夕のおつ
とめの際に、「拍子木を勤めながら、
会長としてなるべく大きな声で地方を
歌おう」と思って勤めていましたが、
声が出なくなつてから、一緒に勤める
役員先生方に地方をお願いしておつと
めを勤めていると、自分が一生懸命
歌っていると感じけなかつた「周りの
人の声」に気づくことができました。

これだけの方が一緒にお歌を歌つて
くださっている、そのことにあらため
て喜び、感謝したこと、おつとめだ
けではなくて、日々会長として務めて
いることも、自分自身の力ではなくて、
もちろん親神様・教祖のご守護・お働き
があつて、そして周りの方々に、大勢
の方に支えられて、なんとか会長とし
て務めることができていたことに、あ
らためて気づいて、それにまた喜び、
感謝し、そして、では、どんなメッセー
ジ、「何をしようか」というところは
私自身できていないなど感じていたと
ころ、それは「人に頼る」ということ

でした。

私は、人に物事をお願いする・人を
頼ることがとても苦手で、本当はいろ
んな大教会の御用も「これお願いしま
す」と言つて務めてもらうべきところ
を、ついつい頼みそびれ、日数がなく
なつて自分でせざるを得ないと、そん
なことが何度もありました。そのこと
に思いが至り、そのことを神様がお知
らせくださっているのかなど。「自分
で何とかする」のではなくて、「しつ
かりと周りの人をもつと頼ろう」、そ
の心を心にあらためて定め直して通
りました。

5月1日に声が出なくなつて、7月
に入つてもまだ違和感が喉に残り、咳
が出てしまう状態でしたので、病院で
診てもらいましたが、特に何の異常も
ないとのこと、そうして過ごすうち
に、現在では、その喉の違和感もスツ
キリ消えて、すっかりと地歌も歌える
ようになっていきます。私なりの心定め
を神様が受け取つてくださったと思ひ
ます。

おさいづに

定めるも定めんも定めてから治ま
る。治めてから定まるやない。：：
定めて掛かつて神一条の道とい

う。

(明治24・11・3)

とあります。
自分なりの心定めをする。——見え
られた出来事に対して理の思案をし
て、そしてその神様の思いに近づくに
は何をすればいいか、心を定めて通る。
——ここまでがセットになっているの
かなと気づけた出来事でした。

▼打ち出された新たな実践項目

このたびの年祭活動後半に入り、大
教会から、方針・目標に加えて実践項
目を新たに打ち出しました。

「毎日、喜び感謝を声に出そう」と
いうポスターのようなものを作つてそ
れぞれの教会に配っています。大教会
のホームページからダウンロードして
印刷もできます。ぜひ、ご活用くださ
い。

この「喜び感謝を声に出そう」とい
う実践項目について話します。

まず、このポスター(左図)は、日常
生活のどのようなときに、どんなこと
に感謝ができるかがわかる一覧になつ
ています。

そして、実際に声に出す言葉として、
「もつたいない／幸せ／うれしい／あ
りがたい／結構／：：のおかげ／これ

でちようどいい」、もちろん、これだ
けではなくて、これ以外にも喜び感謝
を声に出せるタイミングがあるでしょ
うし、これ以外にももつといろいろな言
葉があるでしょう。

喜び感謝につながるその言葉を、そ
れを感じたときに素直に声に出す。「あ
りがたいな、うれしいな」と感じたと
きに、ただ心のなかで思うだけではな
くて、言葉に出すことを実践しようと
いうことです。

『逸話篇』の教祖のお言葉に、
言葉一つが肝心。吐く息引く息一
つの加減で内々治まる。(篇137)
また、おさいづに、

言葉は道の肥、言葉たんのうは道
の肥くく 明34・6・14
喜び感謝を感じたときに、素直にそ
れを言葉に表すことを、日常生活のな
かで習慣づけようという思いから、こ
のたびの実践項目の打ち出しとなりま
した。

実際に、私自身、年祭活動後半に入つ
て、これを日常生活のなかで実践して
います。特に喜び感謝を感じるとき、
私ですと、今、子供たちと一緒に、朝
起きたときに神殿に参拝して、「神様
にごあいさつさせてもらおうね。」と

言って、「今日も元気に目が覚めました。ありがとうございます。一日よろしくお願います。」——そんなことを子供と一緒にお願いするつもりで、口に出したり、また、食事を食べるときに、「ああ、美味しいね。ご飯が食べれて幸せだね。」——そんなことを独りでも口にして、子供に対しても言ったり、そんなことをしながら日々を通っています。

そのおかげか、2つ、最近、うれし
いことがあります。1つは、3歳の
長男が夜寝る時間になって、床につ
いたときに、「父さんと一緒に参拝に
行く」と言い出しました。突然です。
おそらく、眠りたくないからの言葉か
もしれないですが、もうそう言われ
ると、思わずうれしくなって、「じゃあ、
一緒に参拝行こうね」と、一緒に、9
時頃で真つ暗な神殿にきて、「今日も
1日、ありがとうございます。おや
すみなさい。」と、そう申し上げて眠
る日がしばらく続いています。

また、これは妻から聞いた最近の出
来事として、その息子がトイレに行っ
たときに妻にズボンを脱がしてもらっ
て、「ズボンを脱がしてくれてありが
とう」と、そんなことを言ってくれた

んだと。喜び感謝を声に出して
通っているその姿が子供に届い
ていたのかなと、親神様・教主
に届いていたのかなと思つたう
れしい出来事でした。

この喜び感謝を感じたときに
素直に声に出すということと付
け加えて、もう1つ、実践項目
でお願いしたいことがあります。
一覽表には書いてありませ
ん。それは何か。——喜び感謝
を感じたときではなく、喜び感
謝を感じれなかったとき、「辛
いな、しんどいな」と思つた
ときにも、「辛いな、しんどいな」
という声を出すのではなく、口から出
る言葉は、「ありがたいな／結構やな
／これでちょうどいい」——そんな言
葉に変えようということですよ。

「辛い、しんどい」と感じた自分の
心を、「ありがたい」と感じる心に変

笠岡大教会教祖 140年祭活動 実践項目

毎日、喜び・感謝を声に出そう

朝目覚めて



生きている事に感謝
動ける事に感謝
布団に感謝
家に感謝

顔を洗う



水の恵みに感謝
身体に細胞に感謝

食事



天と地の働きに感謝
食べ物の命に感謝
携わった人々に感謝

トイレ



体内の働きに感謝
用を足せる事に感謝
トイレ空間に感謝

入浴



火と水のご守りに感謝
浴室に感謝

もったいない
しあわせ
うれしい
ありがたい
結構
～のおかげ
これでちょうど良い

就寝



1日使わせて頂いた身体に感謝
出逢った人々に感謝
与った食べ物・物に感謝
大難は小難に小難は無難に
して頂いて感謝

環境



天然自然の理に感謝
天気
変わらないご守りに感謝
学校・職場・地域に感謝

人間関係



縁、出会いに感謝
家族・夫婦に感謝
仲間・同僚に感謝
たすけあいに感謝

えていくために、出す言葉を変えま
しょう。
言葉を変えることによつて、自身の
心を変えることに繋がみましょう。
この世界は心通りの守護の世界だと
教られます。心が喜んでいなければ、
心が明るく通れていなければ、陽気ぐ
らしいには近づいていくことはできま
せん。

この実践項目、ここには書いてあり
ませんが、喜び感謝を感じれない「辛
い、しんどいな」と思うときにも、自

分の口から出る言葉は、喜び感謝の言
葉に変えて、そして自身の心を「喜び
感謝」な陽気な心に近づける。このこ
とを後半にあたっての実践項目として
あらためて打ち出したい。

この「実践項目」、またそれぞれの
教会で定めた目標・実践項目を通して、
教祖140年祭に向かって成人の歩みをお
進めくださいますようあらためてお願
いして、私の話を終わります。ご清聴
ありがとうございます。

青年会笠岡分会
 タづとめ参拝総会
 青年会



タづとめ参拝



青年会長様ビデオメッセージ



吹き抜けでの親睦会



集合写真

青年会笠岡分会(瀬藤大喜委員長)は10月19日(土)「青年会笠岡分会タづとめ総会」を開催。委員15人を含む、青年会員41人の参加があった。

今回の総会は、2年後の青年会長様御臨席総会に向けた一歩目の総会として、18時30分からの大教会のタづとめに全員で参拝。その後式典が行われた。式典では大教会会長様のご挨拶、続いて中山大亮青年会長様よりビデオメッ

セージを頂いた。青年会長様は立教187年度の青年会の基本方針である、『心を澄ます毎日。―ほこりを減らし、誠を増やす―』について、ご自身の体験をもとにわかりやすくお伝え下さり、「教祖の年祭に向けて、自らが『楽しんで』通らせて頂く事が一番大事」とお話し下さった。

小休止をとった後、大教会中庭の吹き抜けでバーベキューを囲んでの親睦会が催され、親睦会の後半では10代から20代、30代から40代の世代が2人1組となって『対話』を行った。『対話』とは、ある話題を基にルールを定めて

進める会話の事で、今回の話題は①自分の好きなこと、趣味、休日の過ごし方、②お道の好きな言葉、について話し合い、会員同士の理解を深めあった。

瀬藤委員長は「今回、多くの若い世代の方々が参加して下さいました。これは各教会、各会にて先輩・先生方が育成に丹精して下さいました賜物です。青年会もそのバトンを受け継ぎ、2年後の御臨席総会に向かって、より一層つながりを広め、深めてまいります。お声掛け、お心寄せ頂き誠にありがとうございます。と語っている。

(委員 余村 元)

📌 詰所からのお願い

詰所での宿泊・喫食について

- ・ 詰所で宿泊・喫食される場合は、「教会名・代表者名・泊数・食数」を、2日前までには、必ず詰所へご連絡ください。
- ・ 食事をしない(宿泊のみの)場合でも、2日前には申し込みをして下さるようお願い致します。

部内教会・信者に徹底願います。

秋学(秋の学生会の日)

実施学担



愛情を込めて生地を延ばす

11月4日、笠岡学生会担当委員会は、『秋学(秋の学生会の日)』を実施し、24人(うち学生16人)が参加した。参加者はまず大教会で、大教会長様より、目にしたり、体験する事をしっかり喜ばせてもらう事が大切だとお話を聴かせて頂いた。その後、今回の目的地である、香川県に移動するバスの中で、年祭活動後半の実践項目、『毎日、喜び・感謝を声に出そう』につい



全員、うどん学校卒業です

ての説明を受けた。香川に着くと、金比羅山散策の時間となり、700段を超える石段を、皆元気に上った。この日は秋晴れで、山頂付近では、讃岐平野を一望できる景色が広がっていた。午後からは、うどん打ち体験という事で、「中野うどん学校」に入学。学校のような教室で、ユーモア溢れる先生の指導の下、うどん作りの工程を実践した。この1日を通して同じ笠岡に繋がる



瀬戸大橋を背に皆良い表情

学生同士の絆を深め、来年3月に開催される「春の学生おぢばがえり」参加への足がかりとなった。(委員長 上原 繁次)



爽やかな空気の中、石段を上る

▼まだ心にある大教会史編纂の想い
紙面の都合があったり、私の私用公
用があったりで、なかなか前に進めな
い。申し分けないと思う。でも書き続
けなければ、いつ何時、八十の限路に
迷いこむかもしれない。そんな事を感
じる昨今です。では、
次は3男 4代笠岡大教会長を勤め
た上原郁雄兄についてである。兄は戦
時中台湾にいて南洋年鑑の編纂に携
わった事がある。そのあたりから大教
会史の編纂を会長になってから考えて
いたのではないかと思う。笠岡は既に
「笠岡分教会史」は編纂済みであった
が、昭和10年代、大教会に陸級して、
大教会史を編纂する事の大切さをずっ
と考えていたのではないかと思う。分
教会史を一読して、私が思った事は、
これは芦津部内の教会史であるとい
う事、ほとんど初代の聞き書きに依存
している事、佐吉が初代の長女・光を養
女として上原家の存続を図った事への
認識があまりない事、執筆者は川合梅
太郎氏であり、史料の整理ができた

末の弟のまなざし 6

かったのか、記述が煩瑣で、年代順の記述がなっていないので、理解に苦しむ点が多い事、兄が大教会史の編纂を考えていた因は多々あったのではないかとと思う。私は私なりに分教会史を一読して、この教会史の史料を読んでみなければ、と思ったが、当時大教会は移転申請中で、その後大教会が移転して、史料もかなり散逸したのではないかとと思う。残念であるが、仕方がない。

それで、私が天理大学に通っていた、2年次生のとき、夏休み 私は図書館からドストエフスキー全集を借りてきて机の左端に積み上げて読んだ本を右端に積み上げていた。兄はこの頃会長宅の庭で青年とキャッチボールをしていた。ある日、その兄が書生部屋の私の処へズカズカと入ってきて、突然「繁道、お前大教会史を書いてくれよ。部内の教会史から始めてくれ。お前しかおらんね。頼んだぞ。」と言うなりまた出て行ってキャッチボールを始めた。私は「何言うとするねん。アメリカ留学も考えとる大学生に早すぎるワ」と、あまり深く考えもせずに読書に戻ったのを覚えている。

私はその後、「天理文芸」の発刊などもあつて、道友社に出入りするよう

になつて西山輝夫氏の勧めもあつて道友社に勤めることとなつたが、同時に笠岡で大教会青年の辞令を頂き、更に笠岡大教会史編纂委員の辞令を貰つた。第1回の会合が旧大教会の2階の大広間であつたが、20人ばかりの部内担当者達と待っていると、武内清先生が来られて「大変な仕事ではあるが、皆さん力を併せて神殿移転建築申請が始まるこの時、よろしく頼みます。それで、後の編纂の進め方などは、道友社にいる繁道君に一任せよと大教会長さんの思いだから、私はこれで失礼する。それでは、繁道君頼んだよ」これには、私は驚いた。今日青年の辞令を貰つたばかりの私に編纂委員会を任せると言われても、とおもつたが、考えて見れば、大学生の時のあの「ズカズカ」が、ここに生きていたのかと納得した。兄はそういう人だつた。

そういう兄の思い出を話したのであるが、大教会史の史料集成に携わつた私の手許に今一冊の本がある。少し寄り道して、この本の部分を抜粋する。

(此の項続く)

秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいとの思召から人間とこの世界をお創造下さいました 爾来変わらぬ親心のままに 天然自然のお働きと自由の御守護を賜り 陽気ぐらしへとお導き下さいます事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共は親心にお応えするべく 朝夕に御礼申し上げますと共に 届かぬながらもたすけ一条の御用の上に努め励まして頂いております

その中にも今日の吉日はこの二十六日に立教の元一日を祈念しておぢばでつとめられる秋の大祭の理にならない 当教会でも只今からおつとめ奉仕人一同喜び心たすけ心も一人に 明るく陽気に勇んで坐りつとめてをどりをつとめて秋の大祭をつとめさせて頂きます 御前には 今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供たちが 相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げ 尚も変わらぬ親心にお縋りする皆の誠真実の状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて今月は秋の大祭の意義と年祭活動後半の動きとして打ち出した「毎日、喜び感謝を声に出そう」の実践項目の徹底のため 直轄教会へ大祭参拝をさせて頂きました 年祭活動二年目の動きとして今月十九日に青年会笠岡分会が夕づとめ参拝総会を開催 更に十一月四日学生会秋学が開催されます また今月二十七日におぢばにて第九十八回天理教青年会総会 十一月三日四日には全国にて第三回ようぼく一斉活動日が開催されます 教祖百四十年祭に向かつて残り一年三ヶ月しつかりとつとめ切らせて頂く所存でございます 何卒親神様には 旬々にお見せ頂く姿を親心と受け止めたすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受取り下さいまして 万たすけの上に自由の御守護を賜り 一日も早く陽気ぐらしの世の状が実現しますようお願いの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

天理大学おやさと研究所発行『Glocal Tenri (月刊 グローカル天理)』

(第25巻 第6号) より転載 (転載許可取得済み)

ニューヨーク通信 (20)

ニューヨークセンター初代所長上原眞雄氏を偲ぶ

天理教ニューヨークセンター所長

福井 陽一 Yoichi Fukui

コロンビア大学占拠

マンハッタンにあるコロンビア大学では、イスラエルのガザ侵攻を非難する学生による抗議活動が続いている。次第に活動が過激化し、校舎建物を破損して侵入して占拠し、バリケードを築き、窓を割るなど暴動を起こす事態にまで悪化している。4月30日、大学側の要請によってニューヨーク市警が出動して、建物内に立てこもる学生らを強制的に排除し、多くの逮捕者が出た。これらの抗議活動は全米各地の大学に広がっており、これまでに2,000人以上の逮捕者が出ているようで、ベトナム反戦運動以来の全米規模の学生運動になりつつある。

デモに参加しているのは一部の学生である。それ以外の一般の学生からは、キャンパスがロックダウンされているため、図書館や食堂を使えなかったり、授業が休講したり、リモートになったりしているため、高額な授業料に見合う教育が受けられないと不満の声が高まり、授業料の返還などの要求も出ているようだ。5月6月は卒業式のシーズンでもあり、卒業式の開催も危ぶまれている。すでに中止を決めた大学もある。

全米の大学に拡大する反戦活動だが、学生とは無関係のプロの市民活動家が潜入して学生を煽っているとか、外部から資金が流れてプロの活動家を支援しているとの話も聞かれる。ニューヨークのエリック・アダムズ市長は、「若者たちを過激化しようとする動きがある。彼らがそれをやり遂げ、その存在が白日の下にさらされるまで、手をこまねいて待っている気はない」と述べている。コロンビア大学当局は、抗議デモには「外部の扇動者たちが関与しており、彼らが学生たちを訓練した」と警察に伝え、支援を要請したとのことだ。実際に拘束したデモ隊の半数近くが大学とは無関係の外部者だという、警察側の発表もある。そうであれば、プロの活動家に扇動された一般の学生たちが一番の被害者になりうる。この動きがどこまで激しくなるか非常に心配だ。

バイデン大統領は全米各地の大学でのデモについて「抗議する権利はあるが、混乱を引き起こす権利はない」と述べ、キャンパスの占拠などの違法行為を非難した。イスラエルを支援する現政府に対して若者の支持離れが目立ちつつある。今年の大統領選で再対決するトランプ前大統領は、コロンビア大学でデモ隊を強制排除した警察官らを「素晴らしい仕事をした」と称賛。バイデン氏の弱腰な対応が混乱を招いたと批判をしている。この動きは大統領選挙にも影響が出てくるかもしれない。

ニューヨークセンター初代所長上原眞雄氏を偲ぶ

2024年1月10日、ニューヨークセンター初代所長の上原眞雄氏が出直した。享年89歳だった。上原氏は天理大学スペイン語学科を卒業後、1962年にニューヨークに渡った。それは、ちょうど吉田進氏や森下敬吾氏がニューヨークに布教に来たのと同じ頃になる。その頃はブロンクス区にあった吉田氏の自宅に皆集まって月次祭を勤めていた。1971年に吉田氏がハワイ伝道庁庁長としてハワイに行ってから、集まる場所がなくなり、当時おもだった信者の家庭を毎月順番に廻りながら月次祭

を行っていた。そんな中、同年7月に3代真柱がニューヨークに巡教された。それを契機として集いの場所設置の機運が高まり、翌1972年クィーンズ区にあるアパートに神様をまつり、センターの第一歩となった。その後、上原氏の自宅で神様を預かって月次祭を勤めていた。



文化協会起工式での上原氏

上原氏は1972年にニューヨーク・ジャージー笠岡アメリカ布教所を開設している。1977年に現在のニューヨークセンターが設立された時には、センター初代所長として務めた。布教所長を兼任しながら、センターの運営に携わり、現在のセンターの土台を築いた。渡米以来62年間、長きにわたりニューヨークのお道の先駆的な存在として活躍された。

個人的な思い出としては、ニューヨーク文化協会の設立準備委員として熱心に会議に参加され、文化協会の設立に携わり、設立後も運営に心をかけられたことを思い出す。文化協会では、日本語学校の上級クラスを長い間担当された。読書が好きで、小説などの生教材を時間をかけて準備し、楽しく熱心に教えられた。上級クラスを教えるのは準備も知識も要求されるので、私達スタッフはとても助かっていた。音楽も愛好され、晩年は集めた音源をコンピューターに移したり、アーカイブしたりするのが趣味だった。出直される1年前の頃でもお元気で、毎週のように自分で車を運転してニューヨークセンターに来られていた。センターのスタッフと一緒にコンピューターを調整したり、時には自宅のフェンスと一緒に直したりして、お元気な様子だった。

センターの10周年記念誌に上原氏の手記が掲載されているので、その一部を紹介したい。

「今、こうして思い返してみますと、月次祭を欠かすことなくつとめさせて頂いたことが、今日の、このニューヨークの道に続いていると思います。そして、このニューヨークセンターは本当に自然に出来上がってきたのです。無理することもなく、また、無理を強いられることもなく、より集う人たちは皆、自分の心でこのセンターに参拝にみえる。とても素晴らしいことです。人に言われて来るのではなく、お参りしたくてやってくる。実に素晴らしいことだと思います。」

長きにわたりニューヨークの道の発展の上に尽力されたことに、心より感謝申し上げますとともに、先人の足跡を見つめ直して、ニューヨークセンター50周年の節目に向かってさらに一段と成人の道を歩めるように努力したい。

立教百八十七年 秋季大祭 祭典役割表

役割	区分		講話	祭主		扨者	
	前	後		指図方	賛者	指図方	賛者
地方	佐藤道孝	上原志郎	十二月講話	上原繁次	上原繁次	上原繁次	佐藤真孝
おつとめ てをどり	大教会長様	門脇元教	大教会長様	上原繁道	上原繁道	上原繁道	大教会長様
	前会長様	今川昌彦		横山逸郎	横山逸郎	横山逸郎	大教会長様
笛	浅野明教	上原繁次	大教会長様	山野弘実	山野弘実	山野弘実	大教会長様
	中村剛	赤木素志		横山小智榮	横山小智榮	横山小智榮	大教会長様
ちゃんぽん	浅野明教	上原繁次	大教会長様	山野弘実	山野弘実	山野弘実	大教会長様
拍子木	吉岡壽	赤木素志		横山小智榮	横山小智榮	横山小智榮	大教会長様
太鼓	谷内伸自	高木昭祥	大教会長様	山野弘実	山野弘実	山野弘実	大教会長様
すりがね	田林久嗣	岡田誠		横山小智榮	横山小智榮	横山小智榮	大教会長様
小鼓	虫明立生	佐藤真孝	大教会長様	山野弘実	山野弘実	山野弘実	大教会長様
琴	上原順子	内海安子		横山小智榮	横山小智榮	横山小智榮	大教会長様
三味線	今川佐智子	室悦子	大教会長様	山野弘実	山野弘実	山野弘実	大教会長様
胡弓	佐藤香苗	高木孝子		横山小智榮	横山小智榮	横山小智榮	大教会長様

※お詫びと訂正

本年10月21日発行の『かさおか 第63巻第10号』11ページ「立教187年秋季大祭参拝」の記事中「照陽 田中隆之」としておりましたが、10月には参拝されませんでした。

読者の皆様ならびに関係者の皆様にご迷惑をお掛けしましたことをお詫びするとともに、ここに訂正させていただきます。

訃報

岡崎和美さん

大教会おつとめ奉仕人
10月21日出直されました。
享年 62才



21歳特攻隊兵士の言葉が突き刺さる

なあ、お前たち知っているか？
牛や馬は一頭、鳥は「一羽」、魚は「一尾」と、こう数える。なぜか？
実は動物の数え方はな、「死んだ後

に何が残るか」で決まるんだ。

じゃあここで一つ聞きたい。俺たち人間はどうだ？
「一名」、そう、「名前」だ。俺たち人間は死んでも「名前」は残るんだ。

お前たちは、自分の大事な大事な「名」に恥じない「生き方」ができていますか？
一回きりの人生、後悔せぬよう意識すべきことは、「能力」ではなく「生き方」でな、「知識」ではなく「行動」、読むべきものは「空想」でも「本」でも無い、「自分の心」だ。明日人生が終わると思つて生きなさい。永遠に生きると思つて学ばなさい。

それじゃあ、元気に征きます。
▼引用元 YOUTUBE 「心を揺さぶる 最期の質問：21歳特攻兵士が後輩に遺した教え」

140年祭間近の今、知識よりも行動有るべきと思いつつ、自分の因縁に振り回され。
時に昨年は沢山の出直しに際し、涙がこれでもかと流れた年だった。

名に恥じぬようと立派なことや凄いくちしなくて良い。ただあの人のお陰で今があると故人を偲ぶ時、私もそうありたいと願う。
(ほ)